

woman たらす

紙布
(山形県)

若い時のものだから着られない、どうにも組み合わせが難しい、そんな着物があつたら、この紙布の帯をお勧めします。シンプルだからコーディネートしやすく、差し色として赤や緑の帯締めや帯揚げを合わせても引き立ちます。

墨の文字、文様に変身

機能面でも優秀。軽くて、冬は暖かく、夏は涼しい。しかもドライクリーニングができるんです。着慣れた方だけではなく、これから着物を着たいという方にも真っ先に紹介しています。

紙布という通り、素材に和紙が使われています。東北では宮城県の白石和紙が有名ですが、北部では楮コが育ちにくかったため、紙は昔から大事にされてきました。

写真の帯は山形県で作られたもので、織り込んだ紙は商家でつけていた大福帳。帯になる前は、墨でびっしりと文字が書かれていました。どうやって布にするかという、まず一枚ずつばらばらにして、細い短冊に切り、それを擦って一本の糸にし

ます。この紙の糸を横糸に、縦糸には絹を張って手織りしました。波形の箴ハシ(織り目を整える器具)を使ったので、光沢感のある流線が生まれ、独特の表情を醸し出しています。

帯を作った職人によると、昔は火事の時に大福帳などの書き物類を井戸に投げ込んで守ったそうです。日本の製紙技術は高く、水に漬けても紙が溶けず、墨も膠カキが入っているのでにじみませんでした。しかし最近は、家屋の解体とともに大福帳は惜しげもなく捨てられ、作品を作るのは難しくなっているそうです。

大福帳の文字は、織り込まれると美しい文様として浮かび上がります。文字を書いたいにし



帯は「古代紙布織」(中央)。反物は「草木紬(つむぎ)白鷹織」

えの人々の暮らしを思い起こさずにはいられません。

(田中陽子・「暮らしのクラフト ゆずりは」店主)

〈第4金曜日掲載〉